



「佐々木さんを支援する会」会報

# ウブムエ

事務局 〒235-0041 横浜市磯子区栗木 1-22-3 / TEL 045-774-9861  
洋光台キリスト教会内（蛭川明男牧師）／●世話人会代表 加藤 誠  
●事務局長 播磨 聡（広島キリスト教会 TEL 082-293-8683）

ニャルワンダ語で「ウブムエ」(ubumwe)とは、「一致」「調和」「和」を意味する。

## 出会いの豊かさに導かれて

蛭川 潤子

ひるかわ じゅんこ

洋光台キリスト教会会員。事務局として佐々木さんを支えておられます。

佐々木和之さんが、日本バプテスト連盟の国際ミッション・ボランティアに志願され、洋光台キリスト教会は教会員である佐々木さんの推薦教会となって14年が過ぎました。この14年間、毎年、佐々木さんのルワンダでの活動への熱い思いを直接お聞きして、教会も共に祈りつつ、多くの恵み、喜びに与ってることができました。そして私も同じ教会員として、また「佐々木さんを支援する会」の会員として歩ませていただき、14年前には想像だにすることのなかった豊かな出会い、つながりも与えられ、その一つひとつを思うときに感謝の思いでいっぱいになります。

14年前までは、私にとりましてルワンダは未知の国でした。1994年に起きた大虐殺のことも佐々木さんを通して知らされたことでした。同じ地球上に住んで、同じ時代を生きていて、あれほどの惨い出来事が100日間も続いていても、人々の叫びも、嘆きも知ることはなかった私でした。

佐々木さんの活動が始まってから、私もルワンダやそこで起こった大虐殺について、佐々木さんが伝えてくださること以外にも、テレビ番組や映画、本などを通して知る機会が与えられてきました。また、来日されたルワンダの方々の講演会やアフリカ関係の行事などにも出かけていきました。

「ルワンダ」に関連することに関心が向き、アフリカの抱える諸課題にも気づかされました。そして、それはルワンダ、アフリカだけの課題ではなく、国際社会の課題、問題とも通じていることを知りました。距離的にも意識の中でも遠い地で暮らす私でしたが、それらの課題や人々のことを覚えて祈る、祈りを広げ支援の輪に加わる、そこに導かれてまいりました。

佐々木さんがルワンダで活動を始められたころ、大きな衝撃を受けたことがあります。それは、刑期を終えた加害者が地元に戻って、再び同じ地域で被害者の方々と顔を合わせて暮らす、という現



ロドリグさん（左端）、シュクルさん（左から3人目） 洋光台教会にて

実でした。被害者の方々はこれからもどれほどの痛み、困難、葛藤を抱えるのだろう、そしてそれは、あまりにも辛いことではないか、と思わされました。大虐殺が起きる前は隣人、親しい友人、幼なじみ、あるいは親族であったのです。共に暮らしていたのです。その人たちが突然自分たちを「ごきぶり」と言って襲ってきた、現に襲われ深い傷を負わされた、家族を目の前で惨殺された、そのような被害者の方々もいます。その驚愕の記憶はまだ生々しく、恐怖は消えることなく、悲しみ、痛みなどはまだ深く、傷は癒えてはいない、それなのに共に日常を送らねばならないとは。また、凶器として使われたナタは、その後も農作業に普通に使われているナタであり、目の前で振り下ろされているのです。何という怖さ、不安の中でこれから暮らしていかなければならないのだろう、想像しただけで震えてしまいました。

そのような方々に寄り添うため、そして加害者が謝罪し、被害者と和解して、同じ地域で一緒に生きていくために、再び「隣人」として共に歩みだすことができるようにと、佐々木さんは活動を始められました。「私も日本でできることがある、人々に思いを馳せつつ、祈りつつそれを担おう」それが14年前の私の決意でした。

2009年、2013年と、私はミッションスタディーツアーでルワンダに行く機会が与えられました。そこで私を待っていたものは、ルワンダの豊かな自然、そして人々との温かな出会い、交わりでした。

「千の丘の国」と呼ばれる美しい国、ルワンダ。そこで私は多くの方々に出会わせていただきました。思い出すたびに、心を温かくしてくださる方々です。移動する私たちのマイクロバスを運転してくれた青年、休憩中にお互いに片言の英語で話したのですが「僕の家族は、今は兄と二人になってしまった。兄と一緒に運転の仕事をしている。この仕事を頑張っていきたい」と語ってくれました。

被害者、加害者である方々が共に集う集会で、私は、イエスさまに導かれて歩む幸いを証しまし



洋光台教会でお話をするフロリアンさん

た。そこには大勢の方々が集われていて、私が証をしている最中、度々拍手があつたりと、熱心に聞いてくださっているのがわかりました。佐々木さんが、それまで「ウブムエ」で紹介して下さっていた方々も出席していました。思わず、すでに知り合いかのように笑顔を交わしました。佐々木さんが立つと「カズ」「カズ」という声があちらこちらから聞こえてきました。また、移動中の車内で、私たちに同行して下さっていた女性、アグネスさんは私の耳元で「メグミ、ママ」「カズ、パパ」と満面の笑みでささやかれました。このアグネスさんは、愛する家族を殺害され、ご自身は夫を殺した人たちにレイプされた方でした。苦しみ、痛み、悲嘆の中、出会われたのが、遠い日本から来た佐々木和之さん、恵さんだったのです。家族のように親身になって自分のことを考えてくれ、祈ってくれる人との出会い、つながりがどれほどの慰め、喜び、生きていく励ましになっていくのかを私は知りました。そしてまた、遠い日本という国で、会ったこともない人たちが、自分たちのことを心配し、支援してくれているということが支えになっている、ということも知らされました。そして日本にいる私もまた、ルワンダで、和解と平和な世界の実現を願いながら歩み続けておられる方々を思うとき、大きな励まし、希望を

いただくのです。

私の1回目のルワンダ訪問の時に、ある青年が自らの和解への歩みを、NGOリーチの活動が支えてくれていることを話してくれました。4年後に再び訪問した時には、彼は、今度は子どもたちの活動のリーダーになっていました。その活動のひとつのダンスが披露され、私たち日本人もその踊りの輪に招き入れられました。同じ「人間」、命を輝かせ、互いを喜び合って生きると神さまが招いておられる、そのことを実感しながら、私も思いっきり踊りました。笑顔と笑顔がはじけるうれしい時間でした。

佐々木さんの活動は、現在はピアスでの学生たちの教育に力が注がれています。そして、大学の卒業生で、今は佐々木さんの同僚として働かれるようになったセルジさんやフロリアンさんが来日し、嬉しい出会いをいただきました。セルジさんは、虐殺で父親を失った方です。赦せない思いに苦しんだ方です。今、彼は、心に深い傷を負った母親が「いつか、私が支援する女性たちの癒しと和解のプロジェクトに参加してくれたら」と語ら

れました。ブルンジからの留学生だったフロリアンさんも、自国の内戦で心に痛みを負っておられました。しかし彼女は希望をもって「平和と開発センター」でアフリカの平和構築のために活動を続けています。二人は、来日の折に訪ねた沖縄の状況を覚え、心を寄せ、私たちと共にルワンダで祈ってくれています。

この14年間、本当に多くの出会いをいただきました。そして出会いの持つ豊かさを知らされてきました。出会いは人に喜び、勇気、慰め、励ましをもたらす、生きる支え、希望となっていきます。同じ「人間」としての出会いこそが、和解と平和、そして希望につながっていくことを教えていただきました。ピアスでは、国境を超えて平和のために働きたいと願う青年たちの出会いが続いています。そして、その出会いをさらに広げたいと、青少年少女たちにまで活動を広げています。みな、新しい時代を創っていかれる方々です。私も、佐々木さんの活動にこれからもつながり、若者たちの成長と活躍のために祈りつつ、「出会い」を期待していきたいと願っています。

## 平和のために働く若者たちを育て・繋ぐ

**佐々木 和之**  
さ さ き かずゆき

皆様こんにちは！お祈りとご支援に感謝いたします。今年もどうぞよろしくお願ひいたします。

年明けから早3週間。週日は「和解の理論と実践」の集中講義、週末は「プログラム評価」の授業があり忙しくしています。今年も平和のために働く若者たちを育て・繋ぐ働きに精一杯取り組んでいきますので、変わらぬご支援をどうぞよろしくお願いいたします。

### 活動報告・講演のための一時帰国

10月下旬からの約6週間、1都2府9県（岩手、山形、埼玉、東京、神奈川、静岡、京都、大阪、兵庫、福岡、鹿児島、沖縄）を活動報告や講演のために巡り、ルワンダでの

働きについて多くの皆さまと分かち合うことができたことを感謝いたします。今回は、9月末から東京外国語大学に留学している私の教え子たち、ムレカテテ・シュクルさんとイチシャーツェ・ロドリグさんを支援会主催の報告会等の場で皆さまにご紹介する機会も与えられました。東京外国語大学でも彼ら二人との交流会があり、大学の内外から多くの方々が集まってくださいました。PIASSで学んだ元日本人留学生の皆さんとも交流の機会が複数回与えられ感謝でした。



## 沖縄での平和学習

11月の第1週、シュクルさん、ロドリグさん、そしてプロテスタント人文社会科学大学（略称PIASS）での留学を終え東京外語大に復学した内田歩（あゆむ）さんと一緒に、平和学習のために沖縄に行けたことも日本滞在中のハイライトの一つでした。3日間という短い期間ではありましたが、二人は沖縄訪問から大切なことを学び、感じ取ってくれました。レンタカーを借りて平和祈念公園、ひめゆり祈念資料館、糸数アブチラガマ、辺野古の新基地建設阻止行動の現場、普天間ゲート前のゴスペルの集い、嘉手納飛行場等を訪ねました。また、普天間バプテスト教会牧師・緑ヶ丘保育園園長の神谷武宏先生には特別な時間を取っていただき、普天間基地問題の歴史的背景、2017年12月に起きた緑ヶ丘保育園屋上への米軍機からの落下物事故、そして、「再発防止の徹底」や「普天間基地に離発着する米軍ヘリの保育園上空の飛行禁止」等、政府への要請行動についてお話を聞かせていただきました。

沖縄滞在中、シュクルさんとロドリグさんから何度となく「なぜ？」という質問を受けました。「なぜ沖縄に日本の70分の1もの米軍基地が集中しているのか？」、「なぜこれだけ抗議を続ける人々がいるのに、選挙で民意が示されているのに、日本政府は工事を強行するのか？」、「なぜ日本の多くの人たちはこの問題に関心を持っていないのか？」。そして、これらの質問に対して彼らが達した結論、また私自身が強く再認識したことは、「沖縄差別」の存在であり、沖縄の人々に対しての「命の軽視」という問題でした。

これは沖縄県側が以前から指摘したことでありますが、昨日になってようやく、政府が軟弱地盤の問題により辺野古新基地の設計変更が必要であることを認めました。それでも、既に造られてしまった護岸内部の埋め立てを強行

し続けるのでしょうか。シュクルさんとロドリグさんがあまりの美しさに感嘆の声を上げていた大浦湾の生態系がこれ以上破壊されることがないように、更なる軍事基地の押し付けという暴挙を止めることができるように、非暴力で闘う沖縄の方々に連帯していきたいと思えます。

シュクルさんとロドリグさんはその後、冬の寒さには相当苦勞しているようですが、留学期間中に多くのことを吸収したいと、大学内外で積極的に学び、人々と出会っています。彼らの日本での学びと生活に主の導きと祝福が豊かにありますようにお祈りください。



平和紛争研究学科の新しい留学生

## PIASS にとっての嬉しいニュース

PIASS は、1月の第2週から1学期の後半に入りました。私が学科長を務める平和紛争研究学科に関して二つほど嬉しいニュースがあります。まず第一は、今年度から初めて昼間のコースを始めることができたことです。昨年度までは、昼間に学びたい学生たちが大半ではあったものの、学生数の必要最低ラインのである20名以上を満たすことができず、仕事を持つ夜間志望の学生たちとの混合クラスを夜間にしなくてはなりませんでした。今年は22名が集まり、晴れて昼間コースを始めることができたのです。第二は、今年新たにウガンダ、ナイジェリア、マラウィからの学生たちが加わったことです。22名の新入生のうち8名は六つの異なる国々

からの学生です。今となつては、ルワンダ人学生が6名のみだった平和紛争研究学科1年目が懐かしくもなります。あれから6年が経ち、学生数が少しずつ増え、日本を含む9ヶ国の若者たちが学ぶ、国際色豊かなプログラムに成長してきたことを神様に、また皆さまのお祈りとご支援に感謝いたします。

### コンゴ人卒業生が語る献身の思い

卒業生のことで嬉しいニュースがあります。それは、昨年2名の卒業生が奨学金を獲得し、アメリカとベルギーの大学院に進学したことです。そのうちの一人は、イースタン・メノナイト大学の修士課程で学ぶデイビッド・ニリンガボさんです。コンゴで生まれ育った彼は、入学する前からコンゴ・ピース・ネットワークというNGOの職員として、祖国の若者たちを対象とした平和構築トレーニングに力を注いできました。また、在学中に大湖地域キリスト者平和構築ネットワークの副コーディネーターにも選ばれ、その責任を担ってきました。

コンゴでは過去20年以上に渡って内戦が絶えません。ニリンガボさんもまだ1歳の時、武装勢力によって父親が殺害されました。また、14歳の時には2カ月間ほど戦火を逃れて国内避難民になったこともありました。コンゴではこれまで内戦により少なくとも500万人以上の人々が犠牲になり、今も戦火を逃れて国内避難民として暮らす人々が450万人もいます。現在コンゴは、大統領選挙が終わったばかりですが、政権与党による不正があったと見られ、政治的な混乱が暴力的な衝突に発展することが懸念されています。

彼は修士課程終了後、祖国に帰って平和のために働くことを決意しています。「アメリカでは身の危険を感じるような暴力に晒されることはありませんし、何の不便もない快適な生活があります。しかし、コンゴでは朝起きて絶望的な気持ちにさせられる日々が多く、衛生的かどうか



### 積極的非暴力の講義をするニリンガボさん

か分からない水を飲まなければならない、本当に目的地に着けるのか不安を抱えながら旅をしなくてはなりません」。このようにコンゴで生きることの困難さを率直に認める彼は、それでも祖国に帰って平和のために働くことが神様からの召命であると語ります。「私たちの社会を変革するために新しい世代の若者たちが必要とされているのです。コンゴには既に武装勢力に加わった若者世代が存在します。私は、平和のために働く若者世代を生み出したいのです。(中略)現在の不公正な社会構造が構築されるのには時間がかかりました。平和構築のために献身する新しい世代の若者たちが暴力的なシステムを解体し、新たに持続可能な平和構築の礎を築くためにも時間が必要なのです」。

ニリンガボさんのように、非暴力による平和構築への献身の思いが与えられた若者たちが、それぞれの現場で学びと働きを続けていくことができるように、そのために必要な信仰、忍耐、情熱、能力が養われていくようにお祈り下さい。

「あなたがたのうちに働きかけて、その願いを起させ、かつ実現に至らせるのは神であって、それは神のよしとされる場所だからである。」  
(新約聖書ピリピ人への手紙2章13節 口語訳)

# 佐々木 和之

さ さ き か ず ゆ き

## 「ニャンザの光」 平和と生活向上プロジェクト

昨年4月に始動した「ニャンザの光」平和と生活向上プロジェクトの続報をお伝えします。

ジェノサイドの被害者である女性たちと加害者を家族にもつ女性たちが、「和解と共生」を掲げて活動に取り組む女性協働グループ、ウムチョ・ニャンザ（「ニャンザの光」の意）の工房が昨年6月にオープンしました。毎日使える活動拠点が与えられて以来、女性たちはより積極的に協働作業に取り組んでいます。

### 洋裁品の製作開始

7月以降、既に洋裁の仕事に携わっていたメンバーの一人、イマキューレさんが先生になり、他の女性たちのための洋裁講習が始まりました。週に3日間ほど約2カ月間の訓練の後、かなりの個人差はあるものの、女性たちはキテング製の買い物袋、携帯電話用のケース、ポシェットなど、自分たちがまず日常生活で使いたいと思う品々を楽しみながら作っていました。

11月以降は、外部から洋裁の先生を迎え、スポンジを芯にした布製のポーチ、バッグ、ポシェット等の作り方の講習を受けています。12月下旬に日本から帰国した恵と工房を訪ねたところ、「日本に帰国する前には予想だにできなかったくらい素晴らしい」と恵が喜んだ作品の数々が工房の壁に飾ってありました。そして、女性たちは既に自ら使っている作品を身に付けて、とても誇らしげに見せてくれました。

1月にはアメリカからルワンダに研修に来ていた10名の学生たちを工房に連れて行ったところ、女性たちの作品を気に入り、たくさん購入してくれました。半年間の講習を経て、女性たちはようやく自分たちの技術が収入に結びつくことを肌で感じることができ、活動に弾みがつきました。



新しい作品を手に笑顔を見せる女性たち

### ブックカバー製作

ブックカバー製作も週に1回のペースで続いています。昨年秋の帰国時に日本で販売させていただいたブックカバーの収益金は、10万8千円に上りました。このお金の半分はメンバー間で分配され、主に新学期の開始に伴い、お子さんたちが通う学校への納付金として、残りの半分はミシンを買い増したり、工房に備え付ける棚を購入するために用いられるとのこと。日本でブックカバーを購入して下さった皆様、ありがとうございます。

これまでは日本で用いられている聖書や讃美歌、文庫本サイズのを製作してきましたが、今後は他のサイズのものも製作し、工房を訪ねてくる方々にも販売したいと考えています。

### 学生たちも加勢した花の栽培作業

ウムチョ・ニャンザの原点である花の栽培も続いています。11月中旬、約120坪のお花畑に球根を植え付ける作業を完了しました。今年もPIASSピースクラブの学生たちがこの作業に加勢してくれました。21名の学生たちは、穀物袋



に入れた堆肥を畑まで運ぶ作業を担当し、女性たちにとっても喜ばれました。1月12日には、ピースクラブの学生たちとウムチョ・ニャンザの交流会があり、その日もお花畑へ堆肥を運び、すき込む作業を手伝いました。ルワンダ訪問中、あるいは短期留学中のアメリカ人やドイツ人の学生たちも参加しました。堆肥を積み込む場所から畑まで徒歩15分ほどの距離があり、かつ炎天下であったため、ドイツ人学生の1人は、「こんなきつい仕事は初めてだ」と音を上げかけていましたが、女性たちと合わせて総勢48名で取

り組み、約2時間で作業を終えることができました。4月から始まるジェノサイド記念期間に間に合うよう、今後も花の成長を見守っていくこととなります。

2月にはウムチョ・ニャンザを正式な協同組合に組織するための準備作業に入りますが、その第一歩として、協同組合経営の専門家を招いての講習会を計画しています。作れるようになった製品を国内外でどのように販売していくのか、マーケティングが大きな課題です。これからもご支援をよろしくお願いいたします。

## ムレカテテ シュクル

## 沖縄平和学習報告

PIASSから東京外国語大学への留学生。2018年9月来日。

今回の沖縄滞在は、PIASSの「非暴力の理論と実践」という授業で学んだことを実際に目にする貴重な経験となりました。

私は、沖縄が第二次世界大戦中に地上戦を経験したということを、今まで知りませんでした。平和祈念資料館で沖縄の歴史を学び、現在沖縄が抱えている問題は、沖縄の歴史とつながっているのだと感じました。また、人々の悲しみや苦しみが戦争の時から変わらないものがあると思います。普天間基地ゲート前ゴスペルに参加させていただいた際、一人の女性が私に近づいてきました。彼女は、「戦時中に4人の姉妹がアメリカ兵士によって殺されてとても辛い思いをした。だから、米軍基地への反対運動をやめない。でも、私はクリスチャンとして非暴力で戦う。」と私に語ってくれました。暴力に対して暴力で応じず、非暴力で戦うという彼女の言葉は、私の心に強く響くものでした。

もう一つ私の印象に残っているのは、平和祈念公園で犠牲者の方々の名前が刻まれている碑に、敵国側の犠牲者の名前が含まれていたことです。これは私にとっては驚くべきものでした。戦争が

起こったとき、私たちは味方側の犠牲者のことを覚えますが、敵側の苦しみに気づかないことが多くあるからです。しかし戦争は誰にとっても辛いものであり、亡くなった方はみな、敵味方関係なく、戦争によって命を落とした犠牲者に変わりないので。アフリカでは戦争が終わった後、立場上、自分たちの苦しみを口に出して語るができない人たちもいます。このことが負の連鎖をもたらし、復讐を生んでしまいます。私たちは、いろいろな立場に置かれた人々の苦しみや痛みを耳を傾ける必要があることを学びました。



海上での非暴力抗議活動を視察

沖縄での米軍基地に対する抗議活動は、歌を歌ったりスピーチをしたり、非暴力によるものでした。非暴力を貫くことは決して簡単なことではないけれど、沖縄の人たちは非暴力の良き模範だと思いました。特に、沖縄のクリスチャンの方々、教会が非暴力の抗議活動を続けている姿に胸を打たれました。

沖縄の人たちは「平和」というものを大きく長い視点から捉えていると思いました。それは、彼らが環境を守ろうとしていること、戦争が今ないことだけで満足していないこと、後に続く世代のために抗議活動を続けていることから分かりました。平和のために、毎日抗議活動に朝早く出か

け、長い時間を費やしておられる高齢者の方々をとても尊敬します。

私は沖縄に来るまで、沖縄の問題がここまで深刻だとは想像していませんでした。メディアでもあまり目にする機会がなかったからです。これは他の日本人にとっても同じなのではないかと思っています。日本人の中でさえ問題意識が低いのに、国際社会のサポートを得ることはより一層難しいでしょう。沖縄だけでなく日本の未来の世代が、平和のうちに暮らせるよう、沖縄が抱えている問題に関心を示し、問題解決に取り組まなくてはならないと思います。いつも沖縄のことを覚えて祈っています。

## 事務局からのお知らせ

- 佐々木和之さんは、PIASS 平和紛争研究学科長として、和解の現場を学び、平和構築を担う学生たちを育てています。今年から新生が昼間のクラスに移行しました。
- 今号では、皆様の指定募金が用いられて活動している「お花畑プロジェクト」改め「ニヤンザの光・平和と生活向上プロジェクト」の様子をご紹介します。皆様からの尊い募金を感謝いたします。
- 2017年3月にNHK BS-1で放映された佐々木和之さんのドキュメンタリー番組「明日世界が終わるとしても」DVD貸出中。事務局の洋光台キリスト教会（蛭川明男牧師）TEL 045-774-9861にお申込み下さい。

## 第3回 ルワンダ 和解の現場・訪問ツアー

佐々木さんを支援する会主催「第3回 ルワンダ 和解の現場・訪問ツアー」を2019年9月におこないます。今回、ツアーの案内を同封しています。ぜひ、関心のある方にご紹介ください。

- 事務作業を簡素化するため、すべての支援者に一律に「振替用紙」を同封させていただいています。請求ではありませんのでご了承ください。必要な方はご利用ください。

●郵便振替口座 00250-0-112907 佐々木さんを支援する会●

- 佐々木さんを支援する会HP（ホームページ）

<http://rwanda-wakai.net/>

佐々木さんの活動報告、写真館、等。HPから入会手続きも可能です。佐々木和之さん、恵さんのブログも適時更新しています。

- 世話人会 加藤 誠（大井教会牧師）、中條智子（長住教会牧師）、播磨 聡（広島教会牧師）、蛭川明男（洋光台教会牧師）、米本裕見子（日本バプテスト女性連合幹事）